

## われら地球人 NPO・NGO 奮闘記 第5回

# アフリカが抱える問題に関心を持ってほしい

世界を舞台にさまざまな活動に取り組んでいる日本人がいます。この連載では生活環境や文化、考え方の違いに悩みながら、奮闘する彼らの姿を紹介します。

5 回目はウガンダやコンゴで元子ども兵の支援などを行っている

特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス 小川真吾さんにお話いただきました。



おがわ しんご ウガンダ、コンゴ両事業の企画・運営などを担当。

### 第5回 特定非営利活動法人

テラ・ルネッサンス

## 小川真吾さん

ウガンダで駐在を始めた2005年当時、私たちが活動しているスーダン国境に近いウガンダ北部のグル県では、内戦の影響により人口のおよそ9割が国内避難民という状況でした。しかし、ウガンダ政府と反政府勢力「神の抵抗軍」(LRA)が2006年8月に停戦合意し、北部の

治安は落ち着いています。一方、現在LRAはコンゴ北東部に拠点を移し、そこで戦力にするために子どもの誘拐を繰り返し、2009年のクリスマスには数百人単位で住民虐殺、子どもの誘拐が起きました。現在でもLRAで兵士として拘束されている子どもが20000〜30000人ほどいると推測されています。

子ども兵とは18歳未満の兵士のことですが、多くが拉致や誘拐などで強制的に徴兵され、銃の扱いなどのトレーニングを受けた後、戦闘に加わっています。逃げ帰る場所を無くすことや洗脳するために、自分の両親や近所の人を殺害させるなどしています。女の子の場合は戦闘に加わるだけでなく、日常的な性暴力により子どもを産むケースが多々あるのが現状です。虐殺に加担させられる

など加害者にもなってしまう、反政府軍兵士の子どもを抱える彼らが社会に受け入れられ、自立した生活を送ることは容易ではありません。

子ども兵の多くは戦闘中に逃げ出したり、政府軍に保護されたりして帰還するのですが、私たちは支援開始から3年をめどに経済的自立と社会コミュニティへの統合を目的に活動しています。教育を受けず、人を殺し、性暴力を受けてきた彼らのトラウマをケアし、読み書きそろばん、洋裁や木工大工など自立に必要な職業訓練をして、これまでに訓練を受けた128人全員が自立した生活を送っており、現地のレストラン従業員の平均月収約4000円、公務員の約9000円のところ、卒業生の平均月収は約6800円になりました。

## ニーズがあるほど できることがある

支援活動を始めたのは、学生時代にインドのマザー・テレサの施設でボランティアをしたのがきっかけです。マザーが亡くなった1997年にその場にいたことで、自分にとって何か意味があるのではと思うようになりました。その後、JICAの青年海外協力隊員としてハンガリーの旧ユーゴスラビアとの国境の町で活動しました。1999年に北大西洋条約機構(NATO)軍によるユーゴスラビアでの空爆があり、紛争が目と鼻の先で起こったことで紛争問題に強い関心を持つようになりました。それから、別のNGO団体で、9・11後にアフガン空爆が始まってから、緊急人道援助でパキスタン国

境沿いの難民キャンプで物資支援に関わり、カブールで井戸掘りや地雷回避教育などの活動にも携わりました。そんなときにテラ・ルネッサンス代表と出会い、ウガンダでの活動を始めるようになったのです。

アフリカというと物理的にも、精神的にも遠い存在ですが、とにかく



職業訓練で木工大工を教わる元少年兵ら

ニーズがあるところに行きたい、ニーズがあればあるほどできることがたくさんあるという思いが強く、不思議と不安はありませんでした。客観的に見て、アフリカが経験してきた紛争、犠牲者の数、貧困層の割合は明らかに注目されるべきで、そういう中で自分たちの果たす役割は大きいと感じました。

ウガンダで活動を始めて6年経ちますが、やはりフラストレーションはあります。スタッフとの信頼関係の構築は大変で、日本人の感覚からすると、国際協力しているのだから受け入れられて当然だと思われるかもしれませんが、現地からすれば外資系企業のようなイメージ、ビジネスの一つとして見られています。大きなNGOが支払う給料は多額ですが、テラ・ルネッサンスは現地NGOの

水準に合わせているため、国際NGOからすると格段に低く、中には行政や他のNGOなどに「不正をしている」などと言いつらす人もいました。一時は自分が信頼していた人間に、そういうことを言われ、精神的にかなりきつい時もありました。でも冷静になって考えると、そういう格差を作り出したのはまぎれもなく援助マネーで、自分もその1人でした。

今思えばその経験により成長したし、アフリカ人が抱えている援助の現実を、身をもって感じることでできたと思います。彼らからすると白人は今まで、時には北部、時には南部を支持しながら自分たちを都合良く利用してきた存在です。同時に、いろんなものをくれる存在でもあり、それが今では「援助」となっています。すごく両極端なものが複雑に入



ミシンを使った訓練を受ける元少女兵

り交じっていて、歴史を超えたジンマがアフリカ社会の中にはあるということが身にしみて分かりました。

## 日本人的やり方が貴重な存在

支援活動で必要なことをアフリカに関して言えば、日本人的な価値観をベースにした支援だと思っています。良い意味でも悪い意味でも、アフリ

力では量的、数的、法的なことを優先しがちな欧米的なやり方が支配的です。しかし、子ども兵の支援には一人ひとりの安全保障、人間の安全保障が必要で、100人いれば100人とも違う状況があり、一人ひとりの視点に立ったきめ細かな支援が求められています。欧米的なやり方が支配的なアフリカで、人間の安全保障を実現するには、日本人的なやり方が貴重な存在になると思います。今までの活動を振り返ると、理屈抜きにこういう仕事が好きで、活動する中で出会った人たちが自分の支え、エネルギーになっていると感じます。ウガンダの元子ども兵たちは、初めて自分の名前を書くことができた、服を作ることができた、自分の手で収入を得ることができたなど、当たり前の社会生活ができるように

なる中で、表情が一段と良くなりま  
す。絶望の中からでも、やればでき  
るという彼らの生き様に接すること  
は大きなモチベーションです。

子ども兵の問題を含め、アフリカ  
の問題はアフリカだけでは解決でき  
ず、外からの勢力を無視して語るこ  
とはできません。内外の政治的、経  
済的な関係、ウガンダで言えばスー  
ダン南部の石油など、資源問題が北

部地域での紛争長期化などに関係し  
ていますし、使用されている武器は  
外国で生産され流れ込んできたもの  
です。これまでの経験を基に、アフ  
リカの問題に関心を向けてもらえる  
ような本を執筆しており、今夏ごろ  
の出版を予定しています。6年間の  
活動を通して見てきたアフリカの現  
実を日本人たちにも伝えることが  
できればと思っています。

特定非営利活動法人

## テラ・ ルネッサンス

Terra  
Renaissance

2001年設立。「全ての生命が安心  
して生活できる社会の実現」を目的  
に、ウガンダやカンボジアなどで除  
隊兵士や地雷被害者といった紛争  
被害者への支援事業などを手掛け  
る。

### スタッフ構成

本部事務局 6人、  
現地スタッフ 22人

### 加盟団体

国際小型武器行動ネットワーク (IAN  
SA)、世界子ども兵禁止連盟 (CS  
C)、地雷廃絶日本キャンペーン (JC  
BL) など

### 連絡先

〒612-0031  
京都市伏見区深草池ノ内町 5-23  
内藤マンション 105号室  
Tel. 075-645-1802